

飯島虚心『葛飾北齋傳』明治26年

(漢字は旧字体、かなづかいも旧字、句読点も原版のまま。)

原文中の割込み文は8ポ一行に組替した。なお、原文に

はルビがないが読みやすさを考慮して適宜付けてみた。)

凡例

一 余嘗葛飾北齋翁が傳を作らんを欲し、先づ翁の遺族を訪ふに、其の所在分明ならず、去りて翁の墓に到り、寺僧に就き、遺族を問ふに、遺族は既に絶えたりといふ、翁死して僅に四十余年の今日、其の墓前に一柱の烟なし、嗚呼悲哉、又翁と交りし故老を訪ふに、故老多くハ死して、惟四方梅彦狂言作者、露木孔彰の二氏、および二三回翁に面せしといふ、關根只誠氏、戸崎某氏等あるのみ、此の數氏に就き聞き得たること最多し、又翁が嘗畫本類を畫きて與へたる、各書肆を訪ふに、其の書肆、多くは閉店して、唯小林、嵩山房、日本橋二丁目。英 神田須山町、今売葉業とす 山藤山口藤兵衛、馬喰町の數店あるのみ、これに就き翁の手簡數通及翁の遺事數條を聞き得たり、又翁が嘗潜居せし相州浦賀に至り、夫より尾州名古屋に赴き、翁が遺事數條を探り得たり、其の他は、諸氏の記録、諸氏の傳説、および翁が筆跡によりて、此の傳を作ることを得たり。

一 引用の書ハ、北齋翁か著者を除きて古画備考、扶桑畫人傳、増補浮世繪類考、関根氏増補 戲作者略傳、物之本作者部類、廣益諸家人名録、泰平年表、一話一言、光琳印譜、大畫即書細圖、「北齋大畫即書細圖」、暁齋畫談、青本年表、合卷繪草紙目錄集、繪畫叢誌の類なり。

一 此の書刊行にあたり、校正數回に至れども、猶誤謬脱漏なきこと能はず、假令ハ、

上巻初丁の裏、十一行の注、寶歴十年の下におきて、九月の二字を脱するの類のことし、これ等ハ巻末に、正誤の一條を設け、校正して揭示せり、讀者就きて見るべし。

一 下巻刻板の書を擧ぐる條ハ、余か嘗一閱せしものゝ外ハ、諸書の奥附および青本年表、合巻繪草紙目錄集等に載せたるを拾ひて、掲けたるなり、故に或ハ改題の書ありて、重複せしもあらん、或ハ書名のみありて、彫刻せずして、止みたるもあらん、又出版の年月および著者、出版者の名、詳ならざる物あり、是等ハ、他日細に搜索して、揭示すへし讀者幸に其の疎漏を責むるなかれ。

一 本傳に漏れたる翁か錦畫の目錄、諸氏所蔵の肉筆類、印面落款の類、翁か畫を鑑定する方法、翁か運筆着色の方法等ハ、別にこれを輯録し、又年代を追ひ翁か畫の絶妙なるもの數葉を選び、模寫して梓にのほせ、これを添へて一冊となし、他日出版すへし、

明治廿六年六月

著者誌